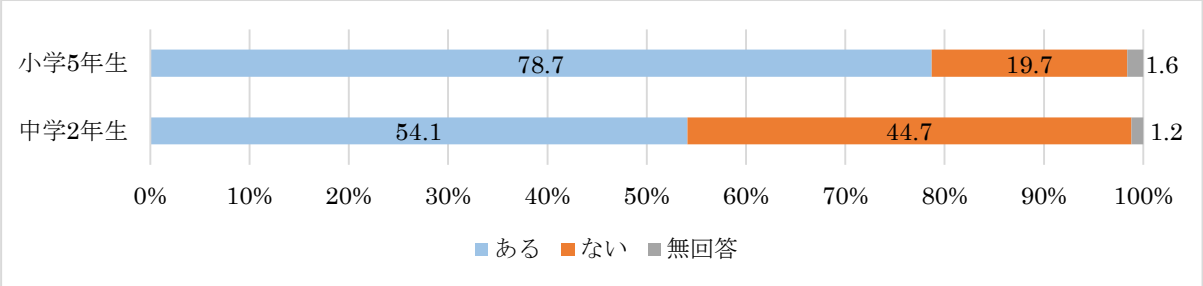
第７章　子どもの自己肯定感

１．子どもの夢

（１）将来の夢

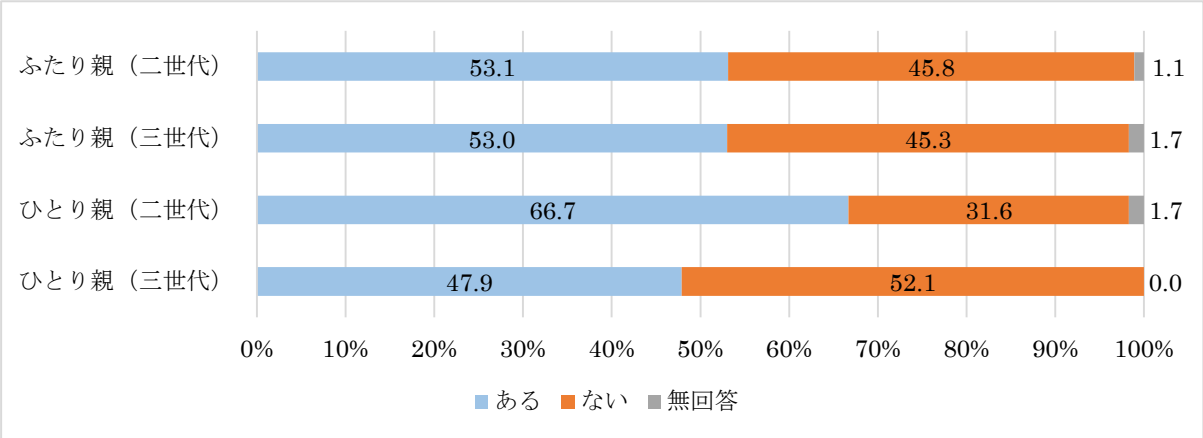
本調査においては、子ども票にて子ども本人に将来の夢の有無を聞いている。その結果、小学5年生の78.7%が、夢が「ある」、19.7%が、夢が「ない」と回答した。夢が「ある」割合は、中学2年生では小学5年生に比べて大幅に低くなり、「ある」と回答したのは全体の54.1%、「ない」と回答したのは44.7%であった。

図表 7-1-1　将来の夢



夢の有無を、世帯タイプ別、生活困難度別で見ると、小学5年生ではいずれも統計的に有意な差は見られなかった（図表省略）。しかし、中学2年生では世帯タイプ別にて統計的に有意な差が見られ、「ない」と回答した割合が最も高いのは、ひとり親（三世代）世帯の52.1%、最も低いのはひとり親（二世代）世帯の31.6%である。

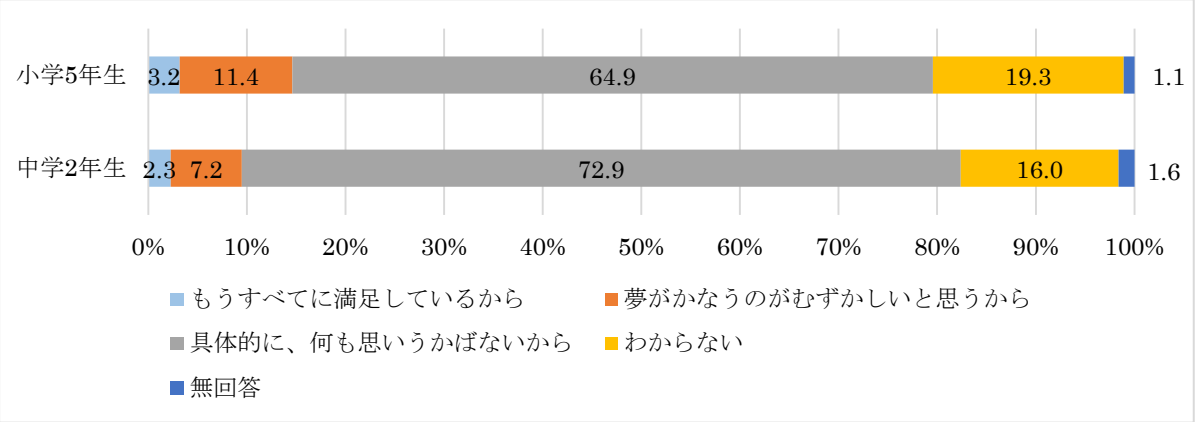
図表 7-1-2　将来の夢（中学2年生）：世帯タイプ別（***）



（２）夢がない理由

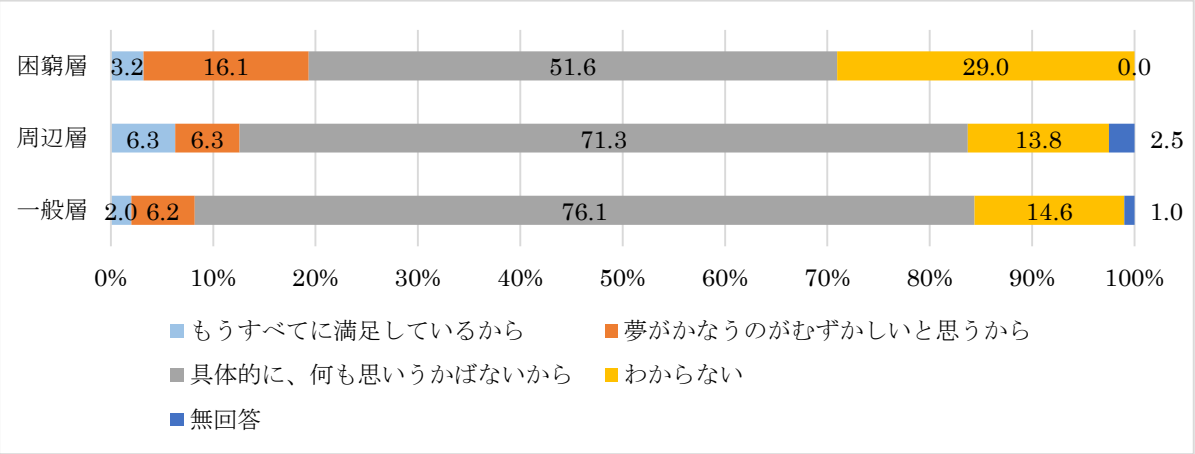
次に、夢が「ない」と答えた子どもたちに対し、将来の夢がない理由を聞いた。すると、小学5年生、中学2年生いずれも「具体的に、何も思いうかばないから」が最も高く、小学5年生では64.9%、中学2年生では72.9%だった。一方で、小学5年生の11.4%、中学2年生の7.2%が「夢がかなうのがむずかしいと思うから」と回答しており、一部の子どもは夢をあきらめている。

図表 7-1-3　将来の夢がない理由



世帯タイプ別、生活困難度別で見ると、小学5年生ではいずれも統計的に有意な差は見られなかった。しかし、中学2年生では生活困難度別で統計的差が見られ、困窮層においては16.1%の子どもが「夢がかなうのがむずかしいと思うから」と回答している。

図表 7-1-4　将来の夢がない理由（中学2年生）：生活困難度別（**）



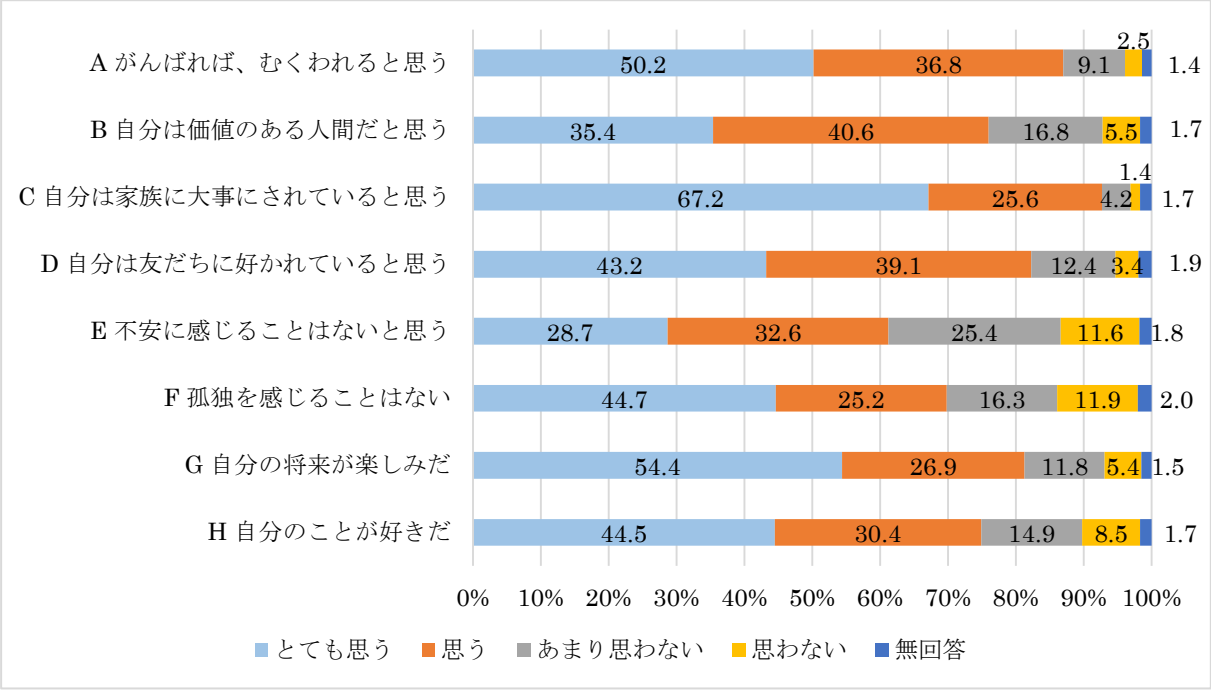
２．自己肯定感

本調査では子どもの自己肯定感に関連する 8 つの設問を設けている。それぞれの項目において、「とても思う」「思う」「あまり思わない」「思わない」の 4 段階の選択肢を設けて回答してもらった。

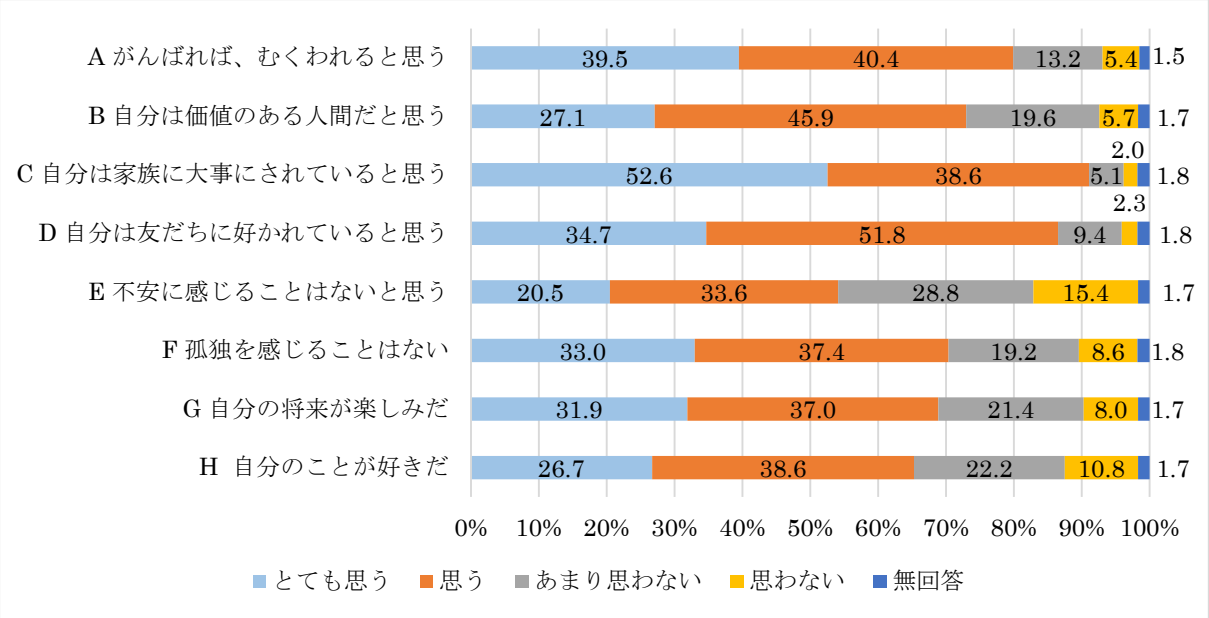
「A がんばれば、むくわれると思う」の項目については小学 5 年生の 50.2%が「とても思う」と回答する一方、中学 2 年生で「とても思う」と回答する割合は 39.5%である。「B 自分は価値のある人間だと思う」については、「とても思う」「思う」は、いずれの年齢層で 7 割を超えているものの、小学 5 年生の 5.5%、中学 2 年生の 5.7%が「思わない」と回答している。「C 自分は家族に大切にされていると思う」の項目において、「とても思う」と回答した割合は、小学 5 年生で 67.2%、中学 2 年生では 52.6%である。また、「D 自分は友だちに好かれていると思う」について「とても思う」と回答する小学 5 年生は 43.2%であるのに対し、中学 2 年生では 34.7%である。「E 不安に感じることはないと思う」については、小学 5 年生の 37.0%、中学 2 年生の 44.2%が、「あまり思わない」「思わない」と回答しており、特に中学 2 年生の子どもで何かしらの不安感を抱えていることが伺える。また、「F 孤独を感じることはない」については、小学 5 年生の 28.2%、中学 2 年生の 27.8%が、「あまり思わない」「思わない」（=孤独を感じる）と回答している。

また、「G 自分の将来が楽しみだ」については、小学 5 年生の 5.4%、中学 2 年生の 8.0%で「思わない」と回答している。最後に、「H 自分のことが好きだ」の項目において「とても思う」と回答した小学 5 年生は 44.5%であるのに対し、中学 2 年生の 26.7%である。また「あまり思わない」「思わない」と回答した中学 2 年生は合計 33.0%にのぼる。

図表 7-2-1　自己肯定感（小学 5 年生）



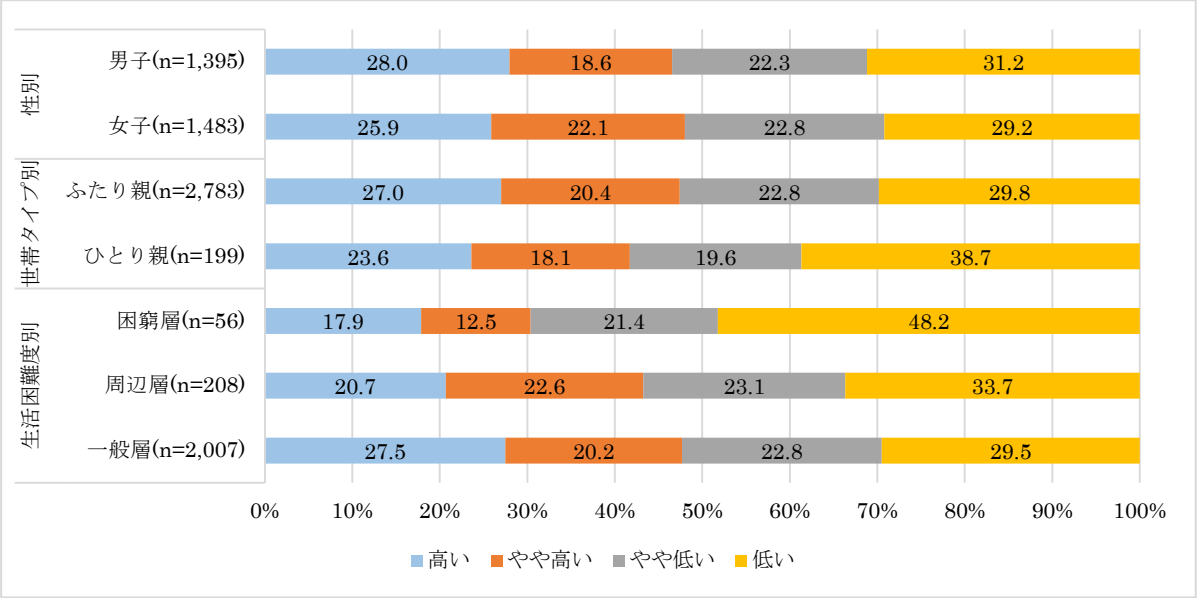
図表 7-2-2　自己肯定感(中学 2 年生)



次に、自己肯定感の全体的な傾向を把握するために、これら 8 項目を使用して「自己肯定感」の点数化を行った。8 項目それぞれにおいて「とても思う」を 3 点、「思う」を 2 点、「あまり思わない」を 1 点、「思わない」を 0 点とし、全ての得点を合計して一つの「自己肯定感」指数として定義した。分析対象は、全ての項目に回答しているサンプルのみとし、そうでないサンプルは分析から省いている。次に、この点数を高いものから低いものへ並べ、上位から順に、約 25%ずつ 4 分割にして点数の高いカテゴリから順に、「高い」「やや高い」「やや低い」「低い」と分類した。

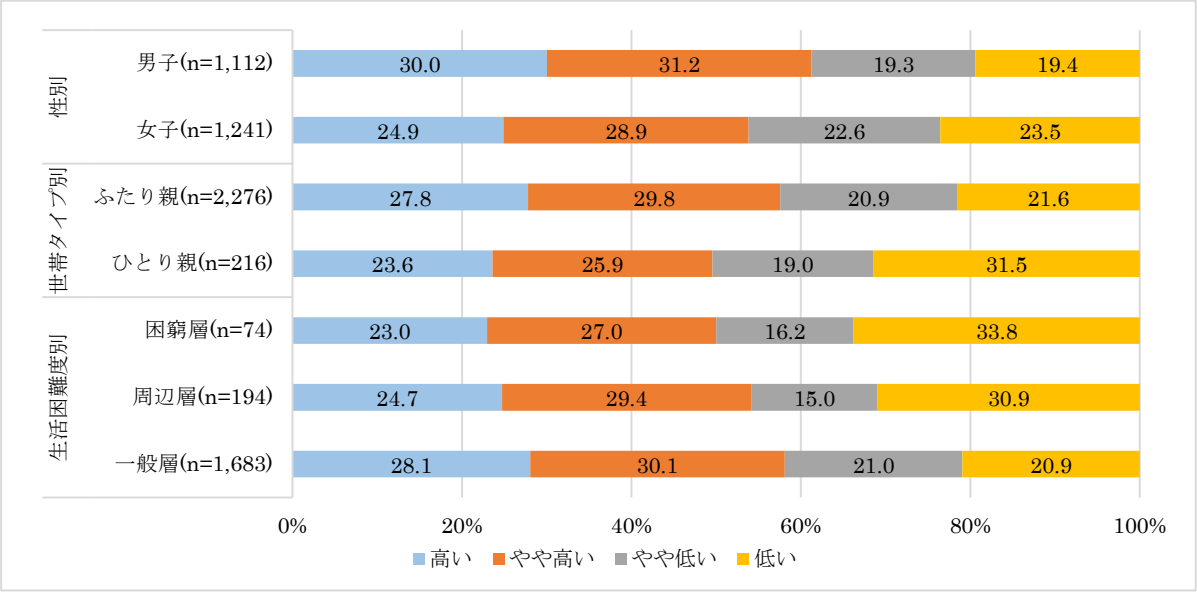
小学 5 年生では、性別、世帯タイプ別、生活困難度別、に、この指標の分布に統計的に有意な差が見られる。性別では、「自己肯定感」指数が「高い」子どもの割合は男子では 28.0%、女子では 25.9%であり、男子の方が女子よりも「高い」割合が 2.1 ポイント高い。世帯タイプ別では、n 値を考慮して、ふたり親世帯とひとり親世帯の 2 区分で集計した。すると、ひとり親世帯の方が、ふたり親世帯よりも「自己肯定感」指数が「低い」割合が高く、8.9 ポイントの差が見られた（ふたり親世帯 29.8%、ひとり親世帯 38.7%）。またひとり親世帯で「高い」割合はふたり親世帯と比べて低く、3.4 ポイントの差がある（ふたり親世帯 27.0%、ひとり親世帯 23.6%）。生活困難度で見ると一般層と比較して困窮層では「自己肯定感」指数が「高い」子どもの割合が 9.6 ポイント低く、一般層の 27.5%に対して、17.9%となっている。同時に、周辺層においては「高い」割合が 20.7%で、「自己肯定感」指数の「高い」割合は一般層、周辺層、困窮層の順である。一方自己肯定感が「低い」子どもの割合は、一般層 29.5%に対して、困窮層は 48.2%と約半数近くが「低」く、18.7 ポイントの差がある。周辺層においても「低い」割合は 33.7%と一般層と比較して高く、「自己肯定感」指数が「低い」割合は困窮層、周辺層、一般層の順に高い。

図表 7-2-3　自己肯定感指数(小学 5 年生):性別(*)、世帯タイプ別(*)、生活困難度別(**)



中学 2 年生でもまた、性別、世帯タイプ別、生活困難度別のいずれの集計においても統計的に有意な差が見られる。性別の差は、小学 5 年生よりも大きく、「自己肯定感」指数が「高い」割合は男子では 30.0%、女子では 24.9%と男子の方が女子よりも「高い」割合が高い。世帯タイプ別で見ると、ひとり親で「自己肯定感」指数が「低い」割合が高く、ひとり親で 31.5%、ふたり親で 21.6%とその差は 9.9 ポイントである。生活困難度で見ると、小学 5 年生と同様に、一般層と比較して困窮層で「高い」割合が低く 23.0%で、その差は 5.1 ポイントである。「自己肯定感」指数が「低い」割合の差については、一般層と困窮層との間でさらに大きい。一般層と比較して困窮層にて「低い」割合が高く、一般層の 20.9%に対して、困窮層では 33.8%、その差は 12.9 ポイントである。

図表 7-2-4　自己肯定感指数(中学 2 年生):性別(**)、世帯タイプ別(**)、生活困難度別(***)



３．子どもの抑うつ傾向

本調査では、小学 5 年生、中学 2 年生の抑うつ傾向を表す指標として DSRS-C バールソン児童用抑うつ性尺度を採用している。

DSRS-C バールソン児童用抑うつ性尺度は最近 1 週間の心の状態（18 項目）について、子ども自身が 3 段階評価を行うものである。各項目は選択肢に応じてそれぞれ 0~2 点で指標化され、その合計が 16 点以上であった場合、抑うつ傾向があると判断される。本報告書では、全ての項目を回答しているもののみを分析対象とし、それ以外は回答者は分析から省いて集計している。

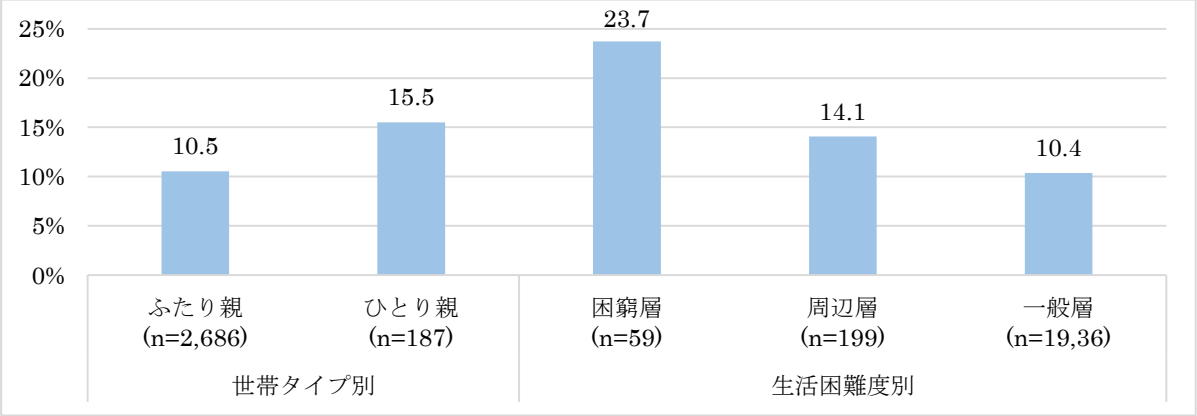
分析の結果、小学 5 年生の 11.1%、中学 2 年生の 17.6%にて DSRS-C バールソン児童用抑うつ性尺度にて判断される抑うつ傾向が見られた。

図表 7-3-1　小学 5 年生、中学 2 年生の抑うつ傾向（DSRS-C バールソン児童用抑うつ性尺度）

抑うつ傾向	小学 5 年生		中学 2 年生	
	度数	%	度数	%
なし	2,601	88.9%	2,030	82.4%
あり	325	11.1%	433	17.6%
合計	2,926	100%	2,463	100%

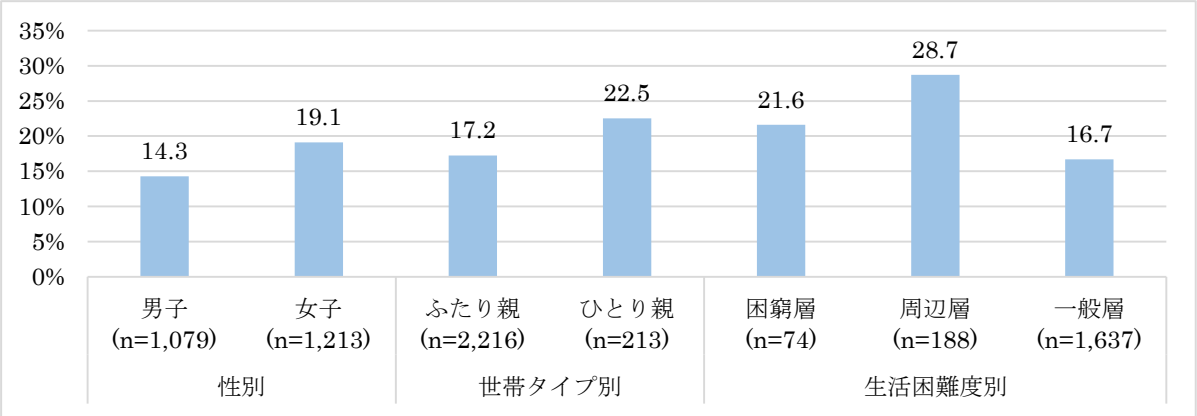
抑うつ傾向の割合を性別に見ると、小学 5 年生では統計的に有意な差は見られなかった。しかし、世帯タイプ別、生活困難度別では統計的に有意な差が見られ、抑うつ傾向がある割合は、世帯タイプ別で見ると、ふたり親世帯の 10.5%に比べ、ひとり親世帯では 15.5%であり、その差は 5.0 ポイントだった。生活困難度別に見ると、困窮層で最も高く、23.7%、次に周辺層（14.1%）、一般層（10.4%）であり、特に困窮層にて高い割合が見られた。

図表 7-3-2　抑うつ傾向がある割合（小学 5 年生）：世帯タイプ別(**)、生活困難度別(***)



中学 2 年生においては、性別、生活困難度別、世帯タイプ別全てにおいて統計的に有意な差が見られる。抑うつ傾向は男子より女子にて高く 19.1%に対し 14.3%、生活困難度別では周辺層が最も高く、28.7%、次に困窮層の 21.6%、一般層では 16.7%となっている。世帯タイプ別ではひとり親世帯においては 22.5%に対し、ふたり親世帯では 17.2%であった。

図表 7-3-3　抑うつ傾向(中学 2 年生):性別(***)、世帯タイプ別(*)、生活困難度別(***)



参考までに、東京都調査における結果を示すと、抑うつ傾向が見られる子どもの割合は、小学 5 年生は 13.4%、中学 2 年生は 21.7%と本調査より高い[1]。ただし、同調査においては小学 5 年生では生活困難度別の有意な差は確認されていない。全体として抑うつ傾向を持つ子どもの割合は低いものの、小学 5 年生から生活困難度の影響が見られる点が世田谷区の特徴と言える。

[1] 『東京都子供の生活実態調査報告書』においては、分母に無回答が含まれた値（小学 5 年生 12.3%、中学 2 年生 20.1%）が示されている。本章で示す値は図表 7-3-1 の基準に合わせ、無回答を分母から取り除き計算しなおしたものである。

４．まとめ

（１）子どもの夢

将来の夢については、小学５年生の８割近くで夢が「ある」と回答する一方、中学２年生では小学 5 年生に比べて低く、「ある」と回答したのは全体の約半数であった（図表 7-1-1）。小学 5 年生の時点においては、世帯タイプや生活困難度による夢の有無の差は見られないものの、中学 2 年生になると、世帯タイプや生活困難度によって夢の有無や、夢がない理由に違いが出てくる。

中学 2 年生のひとり親世帯においては、三世代世帯では夢がある割合が低い一方、二世代世帯ではふたり親世帯に比べても高くなっており（図表 7-1-2）、さまざまな生活面において状況が厳しいひとり親（二世代）世帯の子どもたちが、厳しい中でも夢を持っている状況が垣間見られる。

一方、夢が「ない」と回答した中学２年生においては、一般層では８割近くが「具体的に何も思いうかばない」と答えたのに対し、困窮層ではこの割合は 5 割にとどまり、16.1%は「夢がかなうのがむずかしいと思うから」と答えている（図表 7-1-4）。中学生は、小学校時代の「プロ野球選手」などといった憧れから、具体的な職業選択に移行していく時期であり、この時期にさまざまな可能性を子どもたちに提示していくことが重要であろう。

また、近年においては、受験生チャレンジ支援貸付や国・大学の奨学金制度なども拡充されつつあるが、必ずしも、全ての保護者がこのような制度について熟知しているわけではない。また、子ども本人が仮に希望の進路があったとしても、実現の可能性がないと最初からあきらめている場合もある。そのため、これらの情報も子どもたちに直接伝えることも、重要であろう。

（２）自己肯定感

自己肯定感については、「がんばれば、むくわれると思う」「自分は価値がある人間だと思う」など８つの問いで聞いている。その結果、大多数の子どもは肯定的な回答をしているものの、両学年ともに２割強の子どもが「自分は価値のある人間だと」思わない、約２割から３割の子どもが「自分のことが好きだ」と思わないといった回答をしている（図表 7-2-1、図表 7-2-2）。否定的な回答の割合は、小学５年生よりも中学２年生にて高い。自己肯定感に係る８つの設問を指数化してその分布を見ると、小学５年生、中学２年生いずれも、男子よりも女子、ふたり親世帯よりもひとり親世帯、また、生活困難度が高いほど自己肯定感が低い（図表 7-2-3、図表 7-2-4）。

学術的には、自己肯定感は、「レジリエンス」（逆境に打ち勝っていく力）に関連することがわかっており、自己肯定感を高める要素としては、学力、友人関係、大人との関係などがあげられている。そのため、5 章で提言した学習支援事業などと共に、まずは、多くの他者（大人および子ども）と触れ合う機会を増やし、その際には、批判的・指導的なアプローチではなく、子どもの自己肯定感を高めることを念頭に置いたアプローチが有効であろう。

（３）子どもの抑うつ傾向

抑うつ傾向については、小学５年生の 11.1%、中学２年生の 17.6%にて DSRS-C バールソン児童用抑うつ性尺度にて判断される抑うつ傾向が見られた（図表 7-3-1）。抑うつの傾向は、男子より女子、ふたり親世帯よりひとり親世帯、生活困難層において高い傾向が見られる（図表 7-3-2、7-3-3）。世田谷区の特徴として、小学 5 年生の時点においても、生活困難度別の抑うつ傾向が顕

著であることである（東京都調査においては、小学 5 年生の生活困難度別においては統計的に有意な差は見られない)。ヒアリング調査からも、世田谷区の生活困難は特に「見えにくい」ことが指摘されており、服装や問題行動といった形で生活困難の影響が露見することが少ないと考えられるが、年齢の低い時期から子どもの内面に影響を与えている可能性がある。